第一回正眼禅国際交流会

ニューヨーク大菩薩禅堂でアメリカ人百人がサマー接心

天下の鬼道林の名で知られる岐阜県・伊深の臨済宗妙心寺派正眼僧堂で、初の禅国際交流会が行われた。アメリカ人百人が、ニューヨーク大菩薩禅堂の「サマー接心」に参加した後、来日。八月二十四日から五日間の日程で、同僧堂を訪問した。

大菩薩禅堂は、九七七年に開禅されたアメリカ最初の禅堂で、現在の参禅者は約二百人。アメリカ各地から参禅するアメリカ人門下生は、毎年夏に一週間の接心を行っており、今年は八月十三日から二十日まで行われた。

今回の交流会は、この接心に参加するアメリカ人門下生と、日本の門下生との交流を深めるために企画されたもの。

伊深の正眼僧堂では、八月二十四日から五日間の接心が行われ、アメリカ人百人が参禅した。

接心は、午前三時半の起床から、夜九時の就寝まで、ほとんど坐禅三昧の厳しい修行生活。

アメリカ人門下生は、日本の門下生と同じ日課をこなした。

接心の様子は、ビデオ・ドキュメンタリー「禅の心」として記録され、アメリカ人の禅に対する関心の高さを物語っている。

大菩薩禅堂の提唱者、ロバート・エイトケン老師（七十八歳）は、「禅の心」の中で、「禅は、社会の一般の人々が禅堂で語れる、最も身近な仏教である」と語っている。

嶋野師家は、今年一年間、正眼短期大学の客員教授として滞在中だが、夏休み中に行なわれる接心のために帰国した。

その機会に妙心寺の奥・サマー接心のために帰国した。

そして、この交流会が行われた。

嶋野師家は、「禅の心」を通じて、日米間の交流が深まるという趣旨から、今回の交流会が行われたという。

接心には、幾つかの独自のスタイルが取り入れられてはいるが、基本的には日本の禅堂の様式に従っている。

それぞれの国の文化に根ざした生活習慣の違いを乗り越えて、禅の真髄を体得しようと、真剣な姿勢であった。

精神的な孤独の中で求めるものが共通することを、言葉を交わさなくても、禅の雰囲気を通して肌で感じ取ることができた。

嶋野師家は、「アメリカ人禅者の禅に取り組む姿勢の中に、育った文化に関係なく、正眼僧堂の禅風が根づいていることを感じた。

禅の心は、言葉や文字を超えたところにある。

禅の普遍性を身をもって再確認させた。

正眼僧堂雲水にも大きな刺激

他方、アメリカ人の修行者達を指導のもとに参禅し、正眼寺僧堂の一端を垣間見ることができた。

正眼寺僧堂は、作務を共にして、短い期間ながら、禅堂生活を共にしてきた。

アメリカ人門下生にとっても、アメリカ人門下生にとっても、正眼寺僧堂の雲水の方にとっても、多いに刺激になったという。

▲張りつめた雰囲気のなかで5日間の接心が行なわれた

◀警策をつくアメリカ人修業者

▲谷師家（右）と嶋野師家（左）

◀経行（きんひん）で禅堂の周囲を歩く

▲大菩薩禅堂の全景

▲大菩薩禅堂、アメリカの本山中の日本的空間

▶禅堂に向かう女性の修行者達